

仲論に於て著者は世上の平兵排斥に對して政治上の閥族は必らずしも藤原氏に限らるべきものにあらざれば平氏に限つて冷靜なる批判を求むるは酷なりと辯じ義仲の最後に至つて其心事を憐み歴史上の遺勅や朝敵の語は多少の寛容を以て見ざるべからずと喝破し、曾我兄弟の仇打を論じては北條時政の假面を剥ぎ、鎌倉時代の二大女流政治家丹後局、彌局及び室町時代の日野富子を論じては波瀾多き是等女性を中心として時代の闇黒面を描寫し、萬里小路藤房の遺蹟を論じては江戸時代の社會組織を説く、時代思想の意義を説明して國民權公親の推移を論じ、賢俊僧止と夢窓國師を捉へ來つては室町時代に、俗界に於ける僧侶の地位が如何にして築きあげられたるかの真相を詳説し、疑問の人物朝山日乘の一生を説いては一波萬波を生ずる戰國時代の大觀を開展し、朝山意林庵を傳しては近世の學風の淵源に溯り、加藤清正鳥居元忠を捉へては武士道を説き、赤穂義士、乃木大將の最後に於て法制を論じたる如き皆人物史家ならぬ著者の人物觀を窺ふべきものにあらざるはなし。(東亞堂發行、價二、八〇)(魚澄)

●奥羽沿革史論 日本歴史地理學會編

昨夏奥州平泉の古址に開かれたる夏期講演會に於ける講演速記を修訂して編輯したるものなり。第一、日本史上の奥州(文學博士

原勝郎氏)は、上古より足利末に至る沿革を論じて奥州文化が南方日本の文化より遅れたる事を指摘し、奥州史研究は奥州人將來の發展に資すべきことを論じ。第二、蝦夷の馴服と奥羽の拓植(文學博士喜田貞吉氏)には、古來蝦夷の馴致に對する努力の跡、彼等が抱ける誠忠無二の思想の淵源由來を詳説す。第三、前九年役と後三年役(文學士岡部精一氏)此兩役は東北豪族中央政府兩勢力の衝突なりとて其戰役の經過及史料地理の説明をなし、第四、平安朝佛教史上に於ける中尊寺の地位(文學博士辻善之助氏)は上方文化の移植は清衡の大目的たりし事を説き、中尊寺・毛越寺の文化史上、佛教史上の地位が京洛の寺院よりも重大なる意義を有すと論ず。第五、藤原三代の事蹟と源賴朝の奥州征伐(文學士大森金五郎氏)は三代の事蹟を説き、其家室を描き、轉じて賴朝の奥州征伐の意義は單た義經追討に非ざりし、上方文化と奥州文化の融合に言及す。第六、南北朝時代に於ける奥州(文學士藤田明氏)は此時代に於ける奥羽の地位を論じ、陸奥太守・鎮守府大將軍の活動を描き、九州南朝史と比較して、顯信等多年の經營が、九州の如く宮方をして忽に凋落せしめざりし事を言ふ。第七、戰國以後江戸時代の奥羽(文學博士吉田東伍氏)戰國より統一に至る間の史實を説き、江戸時代の大名・屋敷・交通を説明す。最後に第八、福井利吉郎氏の「藤原時代の美術と中尊寺」の講演要領

あり。本文四三六頁にして巻頭には詳細を極めたる目次と寫眞及地圖數葉を添ふ。(仁友社發行 價一、七〇〇)〔中村〕

●佛敎史論 境野黃洋著

本書は嘗て著者が公にしたる佛敎史に關する各種の論文十五篇を輯録したるもの。其中「釋迦牟尼佛」、「涅槃經」と佛身論の發達、「數論」と佛敎との關係、「禪に就いて」、「淨土宗の正統非正統の疑義」、「東大寺・圓分寺の敎理」等の章に於ては主として敎理に關する歴史的研究を示し、「達磨に就いて」、「大寺は大寺にあらず」、「奈良の二僧」、「行基菩薩傳」、「傳敎大師に就いて」、「日蓮と親鸞」等の章に於ては史實の考證的研究を示せり。本書は著者が自ら宗敎家たるの立脚點を離れずして、佛敎の史的 연구に努めたる點に於てその面目を窺ふべきものなり。(丙午出版社發行、價一、三〇〇)〔魚澄〕

●後北條氏、民政史論 文學士 牧野純一著

奉公叢書第四編にして著者の明治四十三年、東京帝國大學の卒業論文を發行したるものなり。本書其第一編即本文にては先づ第一章を「後北條氏概觀」とし關東の地理及歴史、早雲の出自の伊勢氏なる事より後北條氏が富國強兵なりし所以五ヶ條を數へ、就中其民政の注意に値すべきことを言ひ、第二章「民政の主義」には

大望ある英雄の民政に留意せし由來を述べ、早雲廿一ヶ條を説き、第三章は「農業に關する民政」と題し、我國史に於て農政は即ち民政なりとて租率の研究をなし、所謂四公六民法の詛を確め後北條氏百年間之れを以て一貫せしは頗る寛大なるものなりと豊臣氏、武田氏、長曾我部氏等の夫れと比較して後北條氏のよく關東の雄たらしめし原因を究め、附加税にも言及し、税制の運用に對する後北條氏の注意の周到なるを記し、又諸般保護制度を列擧し、踴よく行はれしこと後北條氏民政の根本義なる事を例證す。

第四章「工業に關する民政」に於ては諸工匠の保護を記し、第五章「商業に關する民政」にては商人の保護として宿場保護、市場保護、問屋の保護を説き、貨幣政策として撰錢の弊害救治に室町幕府の失敗、氏康の成功せしを記し、第六章「結語」として後北條氏民政の美は早雲一人の功に非ずして守成・繼承の功と相俟つべしとなす。しかも關東既往の歴史即ち頼朝・泰時・時頼等の事蹟が吾妻鏡を通じて與へし感化の輕視すべからざるを説けるは注意に値すべく、又後北條氏が徳川家康に於て名譽ある後繼者を得、後北條氏百年の民政は、關東に於ける武家政治の、光榮ある連鎖なりとて之に深き意義を認めんとせり。第二編は附録にして第一編中に引用せる後北條氏民政史料主要文書百十通を收録す。零碎なる古文書に基礎を置き此著を企てたる著者の眞摯なる態度